

“Childe Roland to the Dark Tower Came”*

についての一解釈

AN INTERPRETATION

OF

ROBERT BROWNING'S “CHILDE ROLAND TO THE DARK TOWER CAME”

大 呂 義 雄

Yoshio Oro

Robert Browning's “Childe Roland to the Dark Tower Came” is one of his most problematic poems. This poem has so far been discussed by many critics from various points of view. The most prevailing view is that this is an allegory. The present author, however, thinks that this poetical work has another literary facet.

When readers recognize in this poem many symbols which stand for many ill symptoms of the contemporary, mechanical civilization at the high tide of the Industrial Revolution, they will surely take a social standpoint when criticizing this poem. This author is opposed to the opinion that “Childe Roland” is an allegorical poem. According to the definition of *The New Columbia Encyclopedia*, an allegory is a symbolic story that serves as a disguised representation for meanings other than those indicated on the surface. The characters are embodiments of moral qualities and other abstractions.

Here in this “Childe Roland”, the protagonist, Childe Roland and the dark tower itself do not represent any moral qualities unlike the hero who is named Christianity, or the worldly city named the City

* 以下 “Childe Roland” とする。

of Destruction, in Bunyan's *The Pilgrim's Progress*. The hero of that story sets out on his pilgrimage, that is, his life's journey, to the Celestial City, but Childe Roland's journey through a plain is related neither to the parable, fable, nor a doctrine of Christianity.

Then, what is "Childe Roland"? This is a poem symbolic of man's existential life in this scientific world. It is said that Browning did not intend writing an allegory, but that it occurred to him as a dream. However, "poets often write better than they know." We cannot disregard many symbols representing social aspects of the days of Queen Victoria. When we read this poem from a social point of view, we can evaluate Browning as one of the most insightful poets into the present world, and because of this, as one of the most modern poets in English literature.

I

1855年11月17日、Robert Browning はそれまでに彼が作った短詩51編をまとめて、これに「男と女」という表題をつけて世に送り出した。出版当初は、当時彼が夫人とともにイタリアのフローレンスに在住していたこともあって、一部の熱狂的な崇拜者たちによって歓迎されたものの、余り一般の読者の関心を引かず、売行きは芳しくなかったようである。しかしながら、今日では優れたブラウニング研究者 DeVane 氏の「『男と女』51編の詩は1855年以来しだいに名声を得るようになり、今ではブラウニングの詩作の最高水準を示すものである。」¹ という言葉に俟つまでもなく、彼の最大の傑作「指輪と本」と並んで、短詩を集めた詩集としては最高のものという評価が定まっている。

ところで、Twentieth Century Views シリーズの Robert Browning 編の序文で、編者の一人 Harold Bloom 氏は「ブラウニングが詩人としてきわめて超人的であるのは一つの詩の中で、その詩を説明するために二つないしはそれ以上に分裂した自我が相闘う時であり、その葛藤が最大にして最も問題となる作品を産み出している」² と述べて12編の詩を挙げている。更に、この12編の詩のみがブラウニングの不変の重要性を立証するであろ

うと言葉を続けて特にこの中の“Childe Roland”を取上げ、約4頁にわたってこの詩を論じている。

又、ロマン主義の詩について優れた研究を行なった Robert Langbaum 氏は、「“Childe Roland”や“Caliban”はすべての劇的独白詩の中でも最上の、しかも最も有名なものの中に入る。」³と賞讃し、彼の著書の中で実に8頁にわたってこの詩を論じているのである。全編がせいぜい204行の短詩としては異例の扱いと言ってもよい。この詩がブラウニングの最も優れた詩の一つであることに異論をはさむ者は今日誰も居ないであろうが、彼自身がこの詩は一種の夢として心に浮んできたと述べているように、現実離れをした性質上、今日に致るまで多くの批評家や注釈者たちの間でさまざまな解釈がなされてきた。この小論では、それらの解釈を踏まえて、この詩のどこに問題があるのか、どの点が優れているのかを検討し、筆者の見解を述べてみたいと思う。

II

ローランドという騎士はこれまで幾度となく試みられ、かつて一度も目的が果されたことのない「暗黒の塔」探索の旅に、初めて出かけて来たのである。この詩の冒頭で彼は白髪あしなえの足萎に逢う。彼はこの足萎が嘘ばかりつき、目は悪意のこもった横目でその嘘がどんな効果を及ぼすか見極め、口は又一人犠牲者が出たわいと歓びを隠しきれず、ほくそ笑んでいると思う。足萎がそこに居るのは騙そうと思って待伏せし、道を尋ねる旅人を罠にかけようとするためであると思われてならない。更に、もしもこの足萎の勧めで、その先に暗黒の塔が隠されているという不吉な小道に逸れて行けば、この足萎の口から骸骨のような笑いが漏れ、嬉しさの余り埃だらけの街道に杖で騎士の碑銘を掻き録すのではないかと推量する。

しかし、ローランドはこのような不吉な予感にもかかわらず、甘んじて指し示された方向へと脇道に入っていく。行く先が識別できても、この探索にけりが付くという喜びほどには誇りも希望も燃えあがらない。というのも、これまで世界中を流浪し、何年かかっても探せなかったのが希望は涸み、幽霊となり、成功した暁には味わえるあの奔放な喜びも感受することができなくなってしまったからである。それでも失敗することが分

っていて、尚弾む心を抑えることはできない。

彼はこの探索の中で長い間苦しみ、しばしば失敗が予言されるのを聞き、幾度となく「同志たち」即ち暗黒の塔探索に旅立った騎士たちの中に名が書き連ねられた。従って、彼ら同様失敗することだけが最上と思われ、心配なのは同志として適わしいかどうかということだけであった。かくて、絶望にも似た静けさで憎い足萎に背を向け、街道から示された小道へと入って行く。その日は一日中どうみても佗しい。夕闇は暮れかかり、曠野が迷える者を捕えるさまを見ようと不気味な赤い流し目を送っている。ローランドは一、二歩曠野に足を踏み入れ、たちまち出られなくなったのに気付く、振返ってあの安全な街道に最後の目を向けると、もと来た道は消え去っている。あたり一面灰色の曠野／地平線の果まで曠野だ。進んで行くことは差支えない。ただそれだけしかなす術はなかった。そこで彼は歩き続ける。思うにこれほど飢えて、卑しい自然を見たことはない。何も生い茂っていない。杉の木立どころか、花すらも望めない。毒麦、燈台草などは何も恐れるものがなく、それぞれの掟で種を殖やしているようだ。いが草でもあれば大した掘出物であった。何もない／この土地が持っている物は異様な姿の貧しさと活気のなさ、それにゆがんだ顔である。「見るか、さもなくば目を閉じよ。」自然は不機嫌に言う。「益なきこと。なす術を知らず。最後の審判の火のみがこの土地を癒し、焼いて灰とし、わが囚人を解き放つ。」

もし葉がぎざぎざの鬼薊が他の草より高く生えていたら、その頭は切り取られていた。そうでなければ、こぬか草が妬んだ。羊蹄のざらざらした、どす黒い葉は傷だらけで、緑色になる希望は全く失われていたが、何物が穴や裂け目をつけたのか？ 畜生が畜生らしいあさましきで葉の生命を踏みしだいたからに違いない。雑草は癲病人の髪の毛のように疎で、細くひからびた葉鞘は血で捏ねたような泥土に突き刺さっていた。体が硬直した盲馬が一頭、骨は一本一本浮き出、どのようにしてそこに来たのかぼんやりと立っていた。お役ごめんとなって悪魔の厩から追出されたのだ！ 生きているのか？ 恐らく死んでいるのかも知れない。赤く萎びて、瘤のついた首を伸ばし、目は錆色のたてがみの下で閉じている。醜悪なもので、これほど痛ましいものも珍しかった。かくも忌むべき畜生は初めてである。これほど苦痛を受けるとは、不埒な馬であったに違いない。

ローランドは目を閉じ、心の中を眺めた。戦う前に男がワインを求め、分に应じて戦いができるように、盃一杯の仕合せな、昔の情景を味わいたいと思った。先ず考えて、後に戦えとはこれぞ兵法。一口、昔のことを味わえば万事うまくいく。いや、そうではなかった！ 金髪で捲毛のカスパートの赤ら顔が浮んだ。奴はよく固くしっかりと抱きしめたものだ。それが奴のやり方だった。ああ、何たることか！ 一夜の面汚し！ 彼の心の新たな火は消え、冷めてしまう。次はジャイルズ。名誉を重じる男で、初めて騎士になった十年前と同様気どらずに立っている。奴が言うには、正直者がやることは何でもやったそうだ。それは結構なことだ。しかし、場面が変り——何としたことか！ どんな首吊り役人が奴の胸に罪状を記した羊皮紙を貼りつけたのか？ 奴の家来もそれを読んだ。哀れな裏切者は唾と罵詈雑言を吐きかけられた。そんな過去よりも現在の方がましである。

ローランドは再び暮れかかった小道へと戻って行く。何も聞こえなければ、見わたす限り何も見えない。夜になれば梟や蝙蝠が現われるだろうか？ 彼がそう自問した時、陰鬱な曠野に彼の心を把え、気を引くものが現われた。突然小さな川が思いがけず蛇のように、彼の行く手を横切った。夕闇にぴったりの、ゆっくりとした流れではない。泡立ち流れているが、この川は赤熱した蹄を冷やす悪魔の洗い場かも知れなかった。見れば黒い渦巻きが怒り狂って、泡や浮滓をとび散らしている。小さくともなんと悪意に満ちていることか！ 流れに沿って、ひねた榛の木が低く跪き、柳は物言わず絶望の余り、発作的に頭から飛び込んだずぶ濡れの自殺者の群である。川は全くひどいことをし、すこしの躊躇もなく、流れ去る。

浅瀬を渡る時、驚いたことに踏んだのは死人の頬ではなかったか。一足又一足と深みにはまらぬよう突き刺した槍に髪の毛か、顎ひげが絡まった。槍で突いたのは水鼠であったか。だが、ああその声はまるで赤子の悲鳴のように聞こえた。向う岸に着いた時は嬉しかった。今度こそもっとまともな所へ行けると思ったが、虫が好すぎる知らせだった。誰が戦ったのか？ 湿った土がこのように乱暴に踏みにじられ、泥濘になるとはどんな戦いが行なわれたのか？ 毒水の水槽の蝦蟇か、赤熱した檻の山猫か—— 戦いはあの恐ろしい円形競技場でも同じようであったに違いない。曠野でなくて何故そんな所で？ その恐ろしい檻へ続く足跡もなければ、そこから出た足跡もない。人を狂気にするとどぶろくが奴らの頭に効いたのだ。ガレー船の

奴隷たちのように、トルコ人は面白半分ユダヤ教徒とキリスト教徒を戦わせる。一ファーロング（ $\frac{1}{8}$ マイル）進んだら、これはどうしたことか！あの拷問の道具は、どんな悪い目的のために使われたのか？あの車裂きの車輪、しごきの道具、いや車輪ではない、人の体を絹糸のように手繰り、引き伸すのにふさわしい耙に似た刑具か？いかにも地獄の責め具らしく見えるが、地上に置き忘れられたのか、それとも錆びた鉄の歯を研ぐために持ってこられたのであろう。

次に現れたのは切株だらけの土地。かつては森で、次には沼になり、今は荒れて何の役にも立たなくなった土地に過ぎない。（このように愚者は笑いの種を探し、物を作っては壊し、遂には気が変わり、立ち去っていく！）一ルード（ $\frac{1}{4}$ エーカー）の中には沼地、泥土、荒石、砂地、真黒の不毛の土地だ。ここかしこに、けげげしいがぞっとする色の、ずきずき疼く癩のような土地や、痩せて苔や腫れ物のようなものが生じている斑^{まだら}の土地。

次に現れたのは中風のような樫の木。歪んだ口のような割れ目は端が裂け、あんぐりと口を開けて死を見つめ、後退しながら死んでいく。これまで同様目的地は遠かった！遙かに見えるものはただ夕闇だけで、足どりを導くものは何もない。そう思った時、一羽の大きな黒鳥、即ちアポリオンの親友が飛び去った。龍の如き大きな翼は羽搏きもせず、胃をかすめて行ったが——恐らく求めていた道案内かも知れぬ。

見上げると、夕闇にも拘らずこしずつ見えてきたが、曠野が一面に山また山に変っていた——そっと忍び寄り姿を見せてきた醜い小高みや盛土^{もりつち}を優雅に山と呼ぶならばだ。（どんなに驚いたか、分ったら大したものだ！）山からどうしたら出られるかということも、同じように難しい。しかし、ぼや々と何か悪企みが起るような気がした。いつかさっぱり分らぬが——恐らく悪夢の中で。ここで、ローランドはこの道を歩くのを止める。もう一度諦めようとした矢先に、カチッと罌が閉じるような音がして、気が付くと彼は洞穴の中だった。

焼けつくようにすぐに彼の心に浮んだ、まさにここがその場所だと！右手の二つの丘²⁰は角をがっしりと組み、頭を低く鬨っている二頭の牡牛。一方、左手には高い禿山が……彼は激しく自己を叱咤する。馬鹿者、愚か者、一生をかけてこれを見るために鍛練してきたのに、土壇場で居眠りをするとは！

真ん中に立っているのは塔そのものである。丸く、ずんぐりとした櫓は愚者の心のように暗く、褐色の石で建てられ、世に二つとない代物である。嵐の手先で、人を愚弄する小妖精は船乗りに隠れた暗礁を教え、坐礁させる。船の龍骨がやられるのはその時である。

夜だから多分何も見えないだろうと思うと、そうではない。又明るさが逆戻りをしている。暮れようとする夕日は沈む前に、洞穴のくぼみの中を照らした。丘は狩猟をしている巨人のように、追い詰められた獲物を見ようと顎に手をのせて横たわっている。「さあ、獲物を刀の柄まで突き通し、止めを刺せ。」

その声は聞こえなかったかも知れない。その時、あたり一面騒音だらけで、彼の耳にも名前が、これまでに姿を消した全ての探索者、彼と同類の者たちの名前が、鐘のように次第に鳴り響いてくる。どんなに強かろうと、どんなに大胆であらうと、又どんなに運が強かろうと、昔の者は一人一人姿を消し、居なくなってしまった。彼の耳には一瞬のうちに多年の悲しみが挽鐘のごとく鳴り響いている。彼らはもう一枚の絵を飾る生きた額縁として、丘の中腹に整然と並び、ローランドの今わの際を見届けようと立っている。一面火の海の中に彼らの姿が見えた。皆知っている人ばかりだった。しかも彼は怯むことなく、喇叭を口に当てて吹いた、「チャイルド・ローランド、暗黒の塔に見参せり。」

III

1887年、ブラウニングが死ぬ二年前に、この詩を寓意詩とする解釈についてある人が彼に糺した時、彼は次のように答えたのである。

「いいえ、全くそうではありません。と言っても私とその解釈を拒まないこともご理解下さい。私が言いたいことはただその詩を書く時、寓意詩としての意図は意識しなかったということです。様子はこうでした——ある年、フローレンスで私は全く仕事をする気がなかったのです。そこで、毎日何かを書こうと決心したのです。そう、最初の日はある人が妻にくれた素晴らしい花籠から暗示を得て、バラの花について書きました。翌日、『チャイルド・ローランド』が一種の夢として心に浮かんだのです。即座にそれ

を書かねばなりませんでした。仕上げたのは同じ日だったと覚えています。しかし、その時はただそうしなければならなかったのです。それ以上に何が書きたかったかは、その時分りませんでした。たしかに今も分りません。しかし、この詩は大好きです。』³ 又 *Browning Cyclopedia* の著者である Edward Berdoe 氏によると、ブラウニング協会で Kirkman 氏がこの詩について寓意詩としての説明をほのめかす論文を読んだが、その時の議論で Furnivall 博士は、ブラウニングにこの詩が寓意詩であるかどうか尋ねた時、三回とも別々の機会に、強くそうではないとの返事を得たと語ったとのことである。この Kirkman 氏の意見とは、「この詩は寓意詩という体裁を借りて、まさに臨終間際の病人のさまざまな心の動きを書いたものであると結論する理由が圧倒的に多い。」というのであった。しかも、この時司会をした Roden Noel 氏も、「ブラウニング自身は『チャイルド・ローランド』には何か隠れた意味があるとは決して思っておらず、又そう思おうともしないが、言葉というものは魔力を持ったシンボルだ。しばしば詩人であれ、操り人形であれ、語った人が言おうと意図したことよりも言外の意味の方が沢山ある。』⁴ と意見を述べている。ブラウニング自身がいくら否定しても、彼と同時代の人々の中にはこの詩を寓意詩とみる人々が多かったのである。前出の Berdoe 氏はこれらの人々の意見を要約しているが、ある者は愛の寓意、ある者は真理探求の寓意、又ある者は「天路歷程」のバニヤン風に暗黒の塔は不信仰、曠野は疑惑を意味する寓意等と考えたのである。Berdoe 氏自身はこれらの意見にはそれほど好意を示していないにも拘らず、彼自身も寓意詩であることを肯定し、「他には考えられない。物質科学時代の（この科学は見えざるものに対する宗教と信仰のもっとも崇高な理想を破壊することが目的であるが）一絵図である。」と述べている。一方、この詩を寓意詩とは見做さない考えもあり、1885年、まだブラウニングが生存中に *Handbook to Browning's Works* を出版した Mrs. Orr は「我々がしてはならないことは、何か意図された教訓がこの詩によって伝えられていると想像することである。』⁵ とすでに警告を発しているが、彼女は Browning と知合いであっただけに、この発言は今日に到るまで重みを持っている。1915年に *Robert Browning* を出版した W. L. Phelps 氏も、「この詩からは首尾一貫した寓意というものは作れない。その事実の故に我々は喜ぶべきだ。これは詩であって説教ではない。この詩

が意図するところは想像力を刺激することであって、良心を覚醒させることではない。」⁶ と Mrs. Orr と同じ立場に立っている。更に Phelps 氏はこの詩の解説の最後に「このロマンティックな詩は全体としてブラウニングのお気に入りの教義、即ち失敗の中の成功を崇高に描いたもう一つの例とみて差支えない。」と結論付けているが、DeVane 氏はこの Phelps 氏の意見を踏まえて、ブラウニングは彼の心の深奥にある綾を夢の形で書き表わしたものと言っている。20世紀初頭の熱狂的なブラウニング愛好者によって、この詩の中に何か人生の教訓めいたもの、或は宗教的真理が熱心に求められた時代から、20世紀後半の新たに新批評の立場から客観的に作品研究がなされ、ブラウニングの詩も再評価されて来ている今日では、例えば、Langbaum 氏の『『チャイルド・ローランド』を寓意的に読むことができないということは常に批評家のコンセンサスとなっている。」という言葉が示すように、この詩を寓意詩とみる研究者は少ないであろう。しかしながら、*A Reader's Guide to Robert Browning* の著者 Norton B. Crowell 氏は Berdoo 氏のこの詩を「物質科学時代の一絵図」とする見解に厳しい非難を下し、「驚嘆すべきほど無感覚と個人的偏見が釣合いを保っている。」と貶しているにも拘らず、この詩は二通りの水準で読まなければならない。先ず表面的な水準では、この詩は一人一人死に向って旅する人間の寓意であり、第二はこちらの方がより重要な水準であるが、個人の孤独で恐ろしい自己の内面への旅、即ち、一人一人誰もが暗黒の塔に着く前になさなければならない恐ろしい旅の研究であると述べて⁷、この詩の持つ寓意的な面を捨てかねている。この詩が寓意詩であるかどうかの結論はさて置いて、更に別の角度からこの詩を検討してみたい。

IV

ブラウニングが1846年9月12日に Elizabeth Barrett と結婚した経緯は、世界最大のロマンスの一つとして人口に膾炙している。彼らはただ二人だけの証人の立会いのもとで、ロンドンの St. Marylebone Church で結婚式を挙げ、一週間後、手に手を取って駆け落同然にイタリアへ旅立ち、フランスを経て、翌年の1847年4月にフローレンスに着き、以後1861年6月に夫人が死ぬまで約14年間、ここで暮すことになった。この詩が書かれたの

は1852年の正月であるから、イタリアに居を構えてから5年になっている。

さて、当時の英国内外の社会情勢はどうであっただろうか。英国は産業革命が頂点に達し、世界にその国力を誇示していた。例えば、マンチェスター市は1760年から1830年にかけて、人口は17,000人から180,000人と十倍に増加し、何百という四、五階建ての工場が林立する煙突から、もくもくと石炭の黒い煙を吐き出していたということである。英国の産業革命は木綿産業から始まった。E. J. Hobsbaum 氏によると、1813年には2,400台の力織機しかなかったのが、1820年までには14,000台、1829年には55,000台、1833年には85,000台、1850年には実に224,000台の力織機が英国に存在していたそうである⁸。1790年、蒸気力がミュール紡績機の運転に用いられるようになってからは大工場が人口の集中度の高い都市にどんどん建設されるようになり、T. S. Ashton氏によると1782年には、マンチェスター及びその周辺には2つしか木綿工場がなかったのに、1802年にはその数は52に達し、更に1811年にはランカシャーで生産される綿製品の五分の四がミュール糸でできており、しかもその糸の大部分が都市で紡がれていたとのことである⁹。このようにマンチェスターは綿工業、リバプールは原綿の輸入と綿製品の輸出というように、それぞれの都市は特定の工業と結びついて急成長していった。ナポレオン戦争の末期に綿が英国の財政収入に占める割合は7、8%であったのが急速に伸び、ある意味では英国経済の伸びを計る尺度となったのである。特にナポレオン戦争が終結した1815年以降25年間は年間6乃至7%という成長率で、1820年代から1830年代にかけては英国経済の実に47%が綿に依存していた。

一方、燃料を多量に使う製鉄業は1780年代にコークスが精錬に用いられるようになり、1829年に溶鉱炉に熱風が吹きこまれる技術が開発されると、その生産高は伸びていった。1780年代に卡ろうじて10万トンを越えるか越えない位であったのが、1820年以前には50万トン、1828年には70万トン、更に1850年には6千マイルもの鉄道網が開通したことと関連して200万トンにも増大している。それに伴い、石炭の使用量も1830年の1,600万トンから1850年の4,900万トンと飛躍的に多くなっている。1814年にマンチェスターを訪れたプロシャの一将校は、「石炭の煙が遠くから観察でき、家々はその煙で煤けている。マンチェスターを流れる河は廃棄された染料で満ち満ちており、まるで染物桶のようだ。全体が憂うつな光景だ。」¹⁰と述べてい

るが、1814年でこうであるから、それ以後のより工業化が進んだ状態はまさに地獄絵図とも言うべき光景であろうことは推測される。急激に進んだ工業化と飛躍的な経済発展を遂げた背景には、我々が見逃すことのできない社会の歪みがある。1830年代から1840年代初期にかけて英国は大きな危機に直面することになる。

1811年と1816年にラダイツ (Luddite) と呼ばれる職工の一団が自分たちを失業させた原因は機械にあるとして、ミッドランドの靴下編機や北部の力織機を破壊するという暴動を起したのである。事実、手織工の数は1820年代には最大限50万人にまで増加したのであるが、それ以後は減少の一途を辿り、1840年代初期には10万人に落込み、1850年代中頃までには殆ど5万人足らずの飢えて悲惨な貧民になって行ったのである。多くの失業者及び貧民たちががんこに根強く、しばしば絶望的に不満を持っていたのがこの時代であり、当然ブラウニングがこれらの社会的な出来事に関心を持たなかった筈はない。

Browning の優れた伝記を書いた W. H. Griffin 氏と H. C. Minchin 氏は「ブラウニングの詩に政治問題が滅多に現われなかったとしても、彼が政治に冷淡だったと推測するのは間違いであろう。」¹¹ と述べている。1842年、“Waring” という詩が出版された年、ブラウニングは友人の Alfred Domett 氏にあてた手紙の中で Sir John Hanmer 氏が反穀物条例の思想に転向したことを喜んでいる。Griffin と Minchin の両氏によると、ブラウニングにとって穀物条例はまぎれもなく大罪悪であるので、それを論じることさえも我慢できないほどであったとのことである¹²。この穀物条例というのは、特に英国では穀物の輸出入を制限する規則である。早くも1361年には英国の穀物を安くしておくために輸出が禁止された。その後、この条例はしばしば発布されたが、この条例の目的は国内資源からの十分に安定した供給を確保し、国外資源に不当に依存することを避けるためであり、又国内供給が十分でない時は輸入を許可するのである。1815年の条例は高い価格を維持し、ナポレオン戦争以後の農業不況を防ぐためのものであった。即ち、国内に産出する小麦の価格が1クォーターにつき80シリング以下である時は外国からきた小麦を製粉業者に放出してはならないと規定したものであった。それによって、農業の発展を助け、万一の場合に備えるための耕作地を作っておこうとしたのである。ところが、人口の増大は外国の小

麦を輸入しないで、国内生産のみに依存することができなくなり、しかも機械工業の改善によって賃金は下り、材料の欠乏によりパンの価格は上るという事態になってきた。ここで穀物条例の問題は農業と工業の問題になった。地主や小作人は賃金は高くても保護政策を必要とし、資本家及び労働者は自由貿易によって生活の急を救わなければならないと言ったのである。1846年に反穀物条例同盟によるキャンペーンによって、Disraeli や Lord George Bentinck によって指導された同じ党の多くの反対にも拘らず、6月に首相 Peel によって撤廃されたものである。実際においては、小麦の国内価格は減多に80シリングに達しなかったとのことである。この条例の欠点は、それが穀物を常に高い価格水準に維持したことにあるのではなく、それが穀物の不足した時にも、饑餓状態に達するまでは外国からの輸入を許さなかったという点にある。

ついで1845年にブラウニングは“The Englishman in Italy”を出版した。この詩の中には、はっきりと「穀物条例」という言葉が歌いこまれている。

フォルチュよ、私の国イギリスでは
人々はまじめに出会って話し合う、
もしも穀物条例の撤廃が正しくて賢いことなら、
——もしもそれがふさわしいことなら
熱風^{シロツク}は黒雲にのって空から立ち去るだろう。

これは、穀物条例の撤廃は一般の国民のためになることは明らかで、その可否を論じるのは熱風^{シロツク}の可否を論じるのと同じほど馬鹿気たことであると言っているのである。この詩行の中でブラウニングは何が言いたかったのであろうか。DeVane 氏は次のように説明している¹³。

「1845年3月に穀物条例についての議論は異常に高まり、ディズレーリは毎夜議会でピールに対し厳しい攻撃演説を行っていた。次に7月の大雨による穀物の不作、8月にはアイルランドや英国南部の馬鈴薯の病害が緊急の事態となり、11月31日ピールは内閣に穀物と食糧を自由に輸入できるよう港を開放することを提案し、翌年穀物条例は廃止された。ブラウニングがこの詩を書いたのは恐らく事態が最悪であった1845年の9月であろう。ここで彼は1940年代初頭のホイッグ（自由）党の当然の信念を表明して

いる。」

V

前述した19世紀前半の社会状況をこの詩にあてはめてみると、表面は中世の騎士物語であるにも拘らず、不思議に符号が一致するところがある。この詩の背景となっている曠野は雑草が癩病人の髪の毛のように疎らで、羊蹄^{ざしざし}がどす黒く生え、緑色になる希望は全く失われていた。この曠野は鉱山、或は炭山の一角と考えられなくはない。その曠野を流れる川も当然黒く渦巻き流れている。その黒さは鉱毒のためか、或は産業廃棄物のためであろうか。その川沿いに並ぶ自殺者にも似た、ひねた榛の木は、現代的に言うところ紡績工場の公害に蝕まれた労働者となろう。ローランドがこの詩の冒頭で出会った足菱は、実は嘘をついたのではなく、間違いなく暗黒の塔に到着する道を教えたのである。この足菱も実はこの曠野の被害者ではなかったろうか。川は人類の生殺与奪の権を握っている。水源地の河が工場排水や下水溝から排出される汚物によって汚染され、その水のために19世紀の初めにはコレラ、チフス、赤痢等の病気がしばしば流行し多数の死者が出た。ローランドが浅瀬を渡った時、槍に髪の毛か顎ひげがまわりついた死人、彼が頬を踏み付けた死人、或は赤子はそれらの死者であったのか、まるで汚物のように棄てられている。曠野にただ一頭、まるで生きているのか死んでいるのか分らないような盲馬が一頭、これもお役ごめんとなって棄てられぼんやりと立っている。技術革新によって動力が蒸気にとって代る以前の馬は色々の所で使われ、大活躍をしていた。今は落ぶれて見る影もない。赤く萎びて瘤のついた首というのは動力源として機械に縛り付けられた馬鞍の作った傷跡であろうか、そのたてがみも機械の鉄粉で錆色になっているかのようである。暗い部屋に閉じ込められ、目隠しをされて日がな一日機械の周囲を歩かされた馬は今盲目になり、過労の余り痩せこけて骨の一本一本が浮き出ている。

ローランドが対岸に着くと、そこは恐しい戦いの跡であった。19世紀当初は又戦いの時代でもあった。国際的にはナポレオンが1804年に皇帝となり、以後数回にわたって行われたナポレオン戦争も1815年のワータールーの戦によって終熄を遂げる。更に1851年にはナポレオンの甥によるクー

デターが起り、1852年11月にはナポレオン三世として復権する。1853年にはトルコ、フランス、サルディニア、英国の四ヵ国連合軍とロシア軍との間にクリミア戦争が起り、1856年まで続く。一方、国内的には1811年と16年には機械によってパンを奪われたとする手工業労働者の暴動が起っている。1846年には反穀物条例の運動が激しく盛り上り、これを撤廃させ、更に人民憲章に代表される労働者の権利獲得運動は、1841年から42年にいたる大不況の中で闘われ、1840年代の末期にはマルクス、及びエンゲルスが述べているように、英国にも共産主義の亡霊が彷徨することになる。ブラウニングがこの詩の中で書いている戦いとはこれらの英国内外における各種の戦いを暗示しているかのようである。

戦いの場から更に1ファーロング進んだら曠野にうっかり置き忘れられたか、錆びた鉄の歯を研ぐために持ってこられたのか、車裂きの刑のための wheel や engine, brake 等の拷問の道具が横わっている。brake というのは次の harrow と同じ意味と言われているが、これは鉄の刃や円板状の刃が付いている道具で、土の塊を砕くために鋤で耕された畑の上を引かれたり、茎をほぐすために亜麻の上を引っぱられたりする用具である。これを使って人間の体を絹糸のように引張って延ばすことができるという積りである。しかし、ここで使われている“reel”という単語は糸巻きで糸を巻き取るという意味があるので、harrow は耙状の形をした織機^{まぐわ}の一部分を連想させる。このような文脈でこれらの拷問の道具を読むと、織物工場で、まるで地獄のような環境の中で、過労を強いられ責苦を味わされている綿労働者の姿が想像できる。ブラウニングはこれらの道具が「地獄(Tophet)の責め具」らしく見えると言っているが、この Tophet とは旧約聖書エレミア書の第七章31節、及び第十九章11節に出ているエルサレム付近の Hinnom の谷の南東端の地で、昔ユダヤ人が偶像 Moloch に子供を生贄として捧げたが、後には不用物焼却地となり、その火は常に絶えることはなかったと言われている。織物工場では当時多くの子供たちが「徒弟」として働いていた。彼らは多くがやっと七歳に過ぎないような子供たちで一日に十二時間から十五時間も一週六日にわたって働かなければならなかった。Ashton 氏によると Mr. and Mrs. Mammond は「彼らの幼い命はせいぜい良くて単調な労苦の中で、悪い時には人間のむごたらしさという地獄の中で使い果された。」¹⁴ と述べたそうである。この Tophet というのは

地獄の苦悩の象徴であった。又、永遠に業火の絶えないゲヘナ、即ち焦熱地獄という意味もあり、ここから想像を飛躍させると、スモッグに昼間でも薄暗い空を、一日中まるで夜空でもあるかのように焦す溶鉱炉の火となるのである。当時の資本家たちが崇拜した機械という邪神は生身の犠牲を要求し、食い尽そうと鉄の歯を研ぎすまして待ち構えていたのである。

次に現われた切株だらけの土地は、かつては森であった所である。石炭が燃料として使われる前は、木炭が主役であった。今では木炭の需要を満たすための濫伐によって荒れ果て、何の役にも立たない土地に化してしまっている。ここかしこ、けばけばしく、ぞっとするような色のまるでき物みたいな土地、痩せて苔だけしか生えていない斑の土地は鉄、銅等の鉱山か或はばた山であろうか。それとも長雨や旱魃などの異常気象によって被害を受け、作物が駄目になった畑地なのかも知れない。

やがてローランドは洞穴にまるで罠にかかったように落ち込んでしまう。左手に見える禿山は工場から排出される有毒ガスによって草木が育たなくなってしまった山のようなものである。右手には二つの丘があるが、まるで四つに組んだ闘牛にたとえられている。これは時代の風潮であった保守と革新、旧体制と新体制、建設と破壊、ブルジョアジーとプロレタリアート、宗教と科学等々相反するものの確執を暗示していると言えよう。真ん中に彼が目ざしてきた暗黒の塔が立っている。その塔を前にしてひるむことなく、「チャイルド・ローランド、暗黒の塔に見参せり。」とラッパを吹くのである。これはこの詩のタイトルにもなっていて、ブラウニングは「リア王」の第三幕、第四場から借りてきたものである。ここではエドガーが狂人のトムを装って登場してくる。場面は同じように荒野である。

「チャイルド・ローランド小暗き塔に着けば、巨人が言うことはいつもの通り、『ふ、ふん、ふん、くさい。ブリトン人の血の匂いがする。』」この古い民謡から取ってこられた言葉は不思議な城にいる巨人は、留守中にローランドが来ているのを嗅ぎつけて、彼を殺して餌食としてしまったのである。

ブラウニングは探求の目的も、最後に騎士ローランドが成功したのか、失敗したのかも述べていない。探求の動機も不明である。最後に騎士が吹き鳴らしたラッパは何のために吹かれたのであろうか。自らが耐え忍び、

最後に発見したことに対する賞讃のラッパか、或は逆に自己を非難するためのラッパであろうか。すべてが不明である。Langbaum 氏は何か道徳的なことを教えているというよりは寧ろ実存的であると述べている¹⁵。その観点はこの詩は状況描写ではなく、探求その物、即ち経験をうたったものというのである。

この暗黒の塔はすべての物の終末を象徴していると言えるであろう。全ての生きとし生けるものには死を意味しているのであろう。暗黒の塔を前にしてローランドは罌のように洞穴に落ち込んでいる。そこから脱出することはできない。そこまで到達したことを成功と見なすならば、それは又死をも意味しているのである。今まで探求に來た騎士で生きて帰った者はいない。すべて行方不明であったが、今は一面燃えさかる焔の中で、一樣にローランドの最後を見ようと亡霊の姿で立っている。

我々人間は遅かれ早かれ死と対面しなければならない。盛者必衰の理通り、栄耀栄華を極めた者も亡びている。かつて文明の頂点に達した国々も又然りである。地球そのものも何十年、何百年、何千年先のことであろうと着実に死の方向に向っていると云ってもよい。このように考えると、この詩は Langbaum 氏の言うように、この現実を前にしてひるむことなく実存的に生きようとする人間性を描いたものと言うことが可能である。

中世の騎士物語という夢物語に形をかりて、十九世紀の機械文明華やかなりし時、人類の未来を詩人としての直観力で見通し、我々にその姿を見せてくれた Browning は偉大であったと言わざるを得ない。

この詩を寓意詩と呼ぶか否かについては、さらに深くこの詩の機能、用語法を調べてみなければならないであろう。結論を先に述べるならば、この詩は象徴詩と言えよう。詩人が物事の説明に何かを用いる場合、隠喩の場合には I. A. Richards 氏の *tenor* (主意) と *vehicle* (媒体) との関係に於てこの両者のコントラストは非常に隔っている。従って、「異質な概念を力付くで結びつける。」¹⁶ ということになるのである。これが寓意の場合になると、詩人はさまざまなシンボルを、どちらかという固定した型にはめ込んでしまう所があるようである。例えば、パニアン「天路歷程」の場合、主人公の名前が Christian であって彼は City of Destruction から逃げようすると述べた場合、主意と媒体との距離は極めて近い。一方、象徴の場合にはこの距離は極端に近くもなければ遠くもなく、自然であり

無理がない。従って、詩人は自由に手を加えて本来の意味から巧みに新しい意味へと変えたり、新しい意味を作り出したりできるのである。

この詩に於て、ブラウニングは多くのシンボルを用いているが、彼自身の意識的な思考作用によるのか、或は単なる直観や靈感によるのか、見事にこれらの媒体を用いて“Childe Roland”という象徴詩を作り上げている。象徴詩であるだけに又読者のそれぞれの特殊なコンテキストでこの詩を読むことが可能になる。この詩を問題詩と言うのは、この可能性を大いに内に秘めた詩であるからであり、一元的な解釈が加えられる詩と比べて、より優れた詩であると言うべきであろう。

NOTES

1. DeVane, *A Browning Handbook* (New York: Appleton-Crofts, Inc., 1955), p. 211.
2. *Robert Browning*, ed. Harold and Munich (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1979), p. 9.
3. DeVane, p. 229.
4. Berdoe, *The Browning Cyclopedia* (London: George Allen and Unwin Ltd., 1964), p. 103.
5. Mrs. Orr, *Handbook to Robert Browning's Works* (London: George Beel & Sons, 1892), p. 275.
6. Phelps, *Robert Browning* (Connecticut: Archon Books, 1968), p. 237.
7. Crowell, *A Reader's Guide to Robert Browning* (Albuquerque: Univ. of New Mexico, 1972), p. 142.
8. Hobsbaum, *Industry and Empire* (Maryland: Penguin Books Ltd., 1968), p. 64.
9. Ashton, *The Industrial Revolution 1760-1830* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1975), p. 60.
10. Hobsbaum, p. 95.
11. Griffin and Minchin, *The Life of Robert Browning* (London: Methuen & Co. Ltd., 1910), p. 131.
12. Ibid.
13. DeVane, p. 158.
14. Ashton, p. 91.
15. Langbaum, *The Poetry of Experience: The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition* (London: Chatto & Windus, 1957), p. 194.
16. Brooks & Warren, *Understanding Poetry* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1976), p. 579.

SELECTED BIBLIOGRAPHY

- Ashton, T. S. *The Industrial Revolution*. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- Berdoe, Edward. *The Browning Cyclopaedia*. London: George Allen and Unwin Ltd., 1964.
- Blackburn, Thomas. *Robert Browning: A Study of His Poetry*. London: The Woburn Press, 1967.
- Cohen, J. M. *Robert Browning*. London: Longmans, 1964.
- Crowell, Norton B. *A Reader's Guide to Robert Browning*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1972.
- Griffin W. H. & Minchin, H. C. *The Life of Robert Browning*. London: Methuen & Co. Ltd., 1910.
- Hobsbaum, E. J. *Industry and Empire*. Middlesex: Penguin Books Ltd., 1975.
- Langbaum, R. *The Poetry of Experience: The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition*. London: Chatto & Windus, 1957.
- Mrs. Orr, S. *A Handbook to His Works of Robert Browning*. London: George Bell & Sons, 1892.
- Phelps, W. L. *Robert Browning*. New York: Archon, 1968.
- Robert Browning: A Collection of Critical Essays* (Twentieth Century Views) ed. Harold Bloom and Adrienne Munich. New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1979.
- The New Columbia Encyclopedia*. New York and London: Columbia University Press, 1975.